

# 長期化する人生の各ステージの位置づけ

— 生涯発達時代の乳幼児期を考える —

本田 和子

はじめに

人生最初の段階たる乳幼児期に独自の意味が発見され、格段の重要性の認識において社会的に注視されるようになったのは、おおむね十九世紀か

ら二十世紀にかけての出来事であった。それは、第一次産業社会から工業化社会への転換を凶り始めた国々において、近代化と総括される社会変革と連動する出来事でもある。結果として、幼い子どもたちは、近代化を成し遂げさらにその推進を

企図する未来社会を担うべく、ふさわしい養育・教育の対象とされ、二十世紀後半には遅まきながら人権の対象ともされた。契約を核とする近代社会で、契約の主体たり得ない未成年者たちに一人前の権利を付与するとは、画期的かつ劇的な価値観の転換といふことができる。この時期に及んで、漸く、社会的に「子ども存在」を不可避とする価値観が、地球上を覆い始めたといふべきであろう。

ところで、近代的孩子も観の確立を見たときとされる二十世紀前半に、人の一生はどの程度の量において措定されていたのだろうか。そして、高齢化が進行し、平均寿命が八十歳を越えようとする今日、飛躍的に長期化した人の一生との対応で、つまり、人生の持ち時間が量的に増大しつつある今日、乳幼児期の位置づけは不動であり続けるのか、否か。六十年の人生の最初の段階として期待

されていた事柄と、八十年の人生のそれとは同一であり得るのか、否か。仮に、乳幼児期の重要性は不変・不動であったとして、その内実にいささかの変化もないと言いつ得るのだろうか。

### 「発達途上態」という価値概念の発生

社会的必要者として「子ども」が発見されて以来、彼らの心身の変化は「発達」と呼ばれ、成人に至るまでに「基本的変化の終了」が期待される必修課題として位置づけられた。もちろん、近代化以前の長い長い時間のなかでも、幼い人たちの心身は、人生の最初の時期に質量ともに急速な変化を遂げていたことは自明であろう。そして、成人としての生き方を可能とすべく、それぞれの社会が要求する成人への課題を達成して一人前と認められていったに相違ない。しかし、それら変化に一定の法則を発見して「発達」と命名し、法則

通りに変化していく過程に一定の価値を付与したのは、未成年者の成長過程にある水準を設定し、その水準への到達を目標達成と期待した近代社会の営みであった。

各種「学校」が普遍的な教育装置として位置づけられることで、就学最適期を示す発達状態への到達が目標とされ、また、職業・結婚・政治参加等、社会生活への適応可能状態への到達が目標とされる。伝統的社会的恒常的に安定した状態とは異なり、不断に変化し進歩し続ける社会の生活者たるべく、基本的な知識情報に加えて、新たな事態への対応を可能とする応用力の育成など、社会が学校に要求するものが増加する。それと連動して、個人が学校に適應するために、基本的能力や耐性にも質量ともに変化が生じて、就学期の子どもたちに、相応の能力・耐性が要求されるのは自明であろう。

さらに、「子どもの発見」と連動しつつ社会的要請に應えて「子どもの心身の発達研究」を活性化させた二十世紀は、後半の認知科学の深化に伴い、その解明のために、「人間の認知活動の極く初期の状態」を、科学という無影灯の下に浮かび上がらせることを求めた。発達研究は乳児から胎児までへと、止まるところのない遡及傾向を示しつつ今日に至ったというわけだ。こうして、密度を濃くしつつ人間の初期段階へと遡り続けた発達研究は、なぜか成人段階到達までという上限に関しては、疑問を呈することをしていない。すなわち、未成年者が成人するまでの心身の変化メカニズムの総称とする「発達観」は、覆されることなく二十世紀を経由してきたのであった。

### 平均寿命の伸長と「生涯発達」

しかし、今世紀に入ると、発達の上限を「成人

まで」とすることに疑義が呈され、問い直しが起こり始めた。伸長し続ける平均寿命に対して、人間の心身変化の解明を「初期段階」だけに限定することの妥当性が問われ始めたのである。増大の一途を辿る高齢者集団に生き甲斐を与え、彼らを社会的人材として活用すべく、「生涯発達」なる概念が提唱され、人の生涯にわたる心身機能の解明が必要とされ出したのである。ただし、「生涯発達」の概念は、彼ら高齢者集団の活用という効率的な目標にのみ奉仕するものではなかった。心身の変化を全生涯にわたってフォローすること、そして、その変化をふさわしく位置づけることは、長い長い一生を与えられた個々人にとっても

意味あることは自明である。なぜなら、生涯にわたる変化を俯瞰し、加齢に伴って変化し続ける自身の心身を肯定すること、そして、それを不可避的な価値として享受することは、それぞれの

生き方とその設計に深く関与するからである。

となれば、「生涯発達」という語と概念の発生が、発達研究の上限を変え、発達という語の内容を変化させるのは当然であろう。何しろ、対象とされる期間が、成人までの二十年前後ではなく、全生涯の八十年とされるのだし、そこに生じる変化が、未成年期のそれのように必ずしも上昇路線を辿るのではないのだから。

### 時代の価値観と「発達」の位置づけ

「発達」という語で示される八十年分の変化は、資質能力の質量あいまっての「増大」や「上昇」



という単一の把握では捉え難い。それゆえに、新しい分節化に伴うそれぞれの位置づけと異なる意味の確認が要請されよう。つまり、単なる「増大」や「上昇」だけではなく、新しい「発達価値」が明確化されねばならないということだ。

先に触れたように、「子どもの発見」も「乳幼児期の重要性の認識」も、いずれも近代化と連動する出来事であった。近代化が、産業構造の一大変化によってもたらされ、それに伴う社会構造の変化は新たな分節化のもとに人々の生き方の再編成を試みている。小さい人たちが成人とは異なる属性において分節化され、「子どもと大人」という二項構造ができあがったのもその結果である。分節化は「子ども」と「大人」を相対する二項として分類しただけではなく、他の次元でも、「経営者と雇用者」「ホワイトカラーとブルーカラー」「就業男子と専業主婦」など、多岐にわたっている。

る。広い意味での近代的階層の出現であった。

それら二分されて対峙させられた各階層間では、力関係に基づいて上下の序列化が進行し、それぞれに相関的な価値観が形成された。子どもよりは大人が上位に置かれ、雇用者にまして経営者が力を持ち、社会的身分と権力とより豊かな経済力を与えられる。家庭内では、家を守る妻よりも外で収入を得る夫が力を持ち、両者の間には自ずからなる序列が形成されたのもその例である。市民的平等を主張した近代は、支配者たる領主層と被支配者たる農民層という対立構造を否定し崩壊させはしたが、産業構造の転換に伴い、新しい対立する二層を随所に出現させたのであった。

となれば、力という点からは「増大」をめざす営みが、序列という点からは「上昇」を志向する動きが、絶対的な価値として人々の視野に迫り出してこよう。知力・体力・財力等、すべてにわ

たつて力を蓄えていくことが是とされ、職場や学校においても序列を上げることが目標となる。したがって、近代資本主義下の競争は、国益追求や資本家層の富の蓄積のための、国家と国家の間に、あるいは巨大企業相互にのみ、適用されるものではあり得なかった。すなわち、大は国家から小は学校や家庭内にまで、競争原理が浸透し、「増大」と「上昇」は不可避の価値として人々の生活全般を覆ったのであった。

子どもが成人するまでに相応の力を蓄える、すなわち、できなかったことができるようになり、人としてのステージを相応しく上り続けることが、未成年者の肩に負わされた至上の課題となる。たとえば、乳児から幼児へ、幼児から小学生・中学生など学校教育の享受者へと、一段ずつ段階を上がっていくこと、できれば可能な限り速やかにそれを成し遂げること、そしてそのための

資質能力の向上が、段階毎に設定された「発達」の目標とされそれをよりよく達成するための仕方が価値とされる。これらはいずれも、「近代」という時代が招き寄せ人に背負させた必然というべきであらうか。

しかし、飽和した近代主義からの脱皮を願う社会的・心性的な変化とあいまって脱近代が志向される今日、単なる「増大」「上昇」という価値観もその絶対性を失って王座が揺らぎ始めている。そうした土壌のなかで出現したのが平均寿命の伸長であり、「生涯発達」という語と概念であった。「生涯発達」という語と概念によって、とかく「増大」と「上昇」を目標とし価値としてきた「発達観」には、当然のことながら疑義が呈されよう。発達観の問い直しと新しい価値の設定が試みられ始めたのは、脱近代のこうした動きとも連動している。社会が新しい価値を求め始

めたとき、人間の心身の変化に關しても、同様に新たな意味づけが求められ始めたのであった。

### 各ステージの位置づけと付与される意味

八十年という時間を、仮に大きく三つに区切ってみる。成人への道を歩む「未成年期」と、成熟した心身機能を駆使して生産に従事する「成人期」、そして、その後にくく「高齢期」である。

成人に至るまでの二十余年を一つにくくることがあるいは、おおよそ四十余年の成人の時代をいくりにすることなど、分節化に伴う乱暴さはあえて承知の上で、これら三分節に即してそれぞれの位置づけを試みるとすれば、それぞれのステージを彩るものとして、以下の記号を付与することが可能ではないか。

「未成年期」という最初のステージには、「生成」「遭遇」「変化」という記号を、成熟した心身を活用する「成人期」には、「生産」「対話」「選

択」を、そして、最終ステージたる「高齢期」には、「持続」「安定」「共生」という特色を付与することができないのではないか。生成し続ける内的エネルギーに促され、未知の人や物との遭遇を繰り返しながら、不断の変化を常態とする未成年期、成熟した心身を駆使して生産活動に勤しみ、人や物との対話を重ねつつ、自身の意とするところを選択する成人期、選択すべき対象には、職業・結婚・家族の構成等、生き方にかかわるすべてが含まれることは言うまでもない。高齢期の心身エネルギーは、生成や生産に機能するにまして、持続のために活用される。心身機能とエネルギーの持続によって、生の安定が保たれるがそれを支えるのが人や物との共生であろう。高齢期の心身の状態が、「増大」「上昇」等の尺度で測られるならば、それらは「衰退」「減少」など、凋落を示す悲しい記号を纏わされることになる。しかし、「持続」と「安定」とそのための「共生」

は、高齢者になうべきふさわしい価値であり、さらにも、人類存続のために地球的規模で求められている切実な価値目標と言い得よう。

さて、ところで、これら試みに設けてみた九種の価値目標、すなわち、「生成」「遭遇」「変化」、「生産」「対話」「選択」、「持続」「安定」「共生」は、とりあえず、成長過程に即した平均的な段階区分に即し、その段階の平均的な心身機能に合わせて設定されている。しかし、これらは、いずれも、人の一生を通じて追求されてしかるべき価値目標であり、個々人の現状に即応して組み替え可能なものと考えるべきであろう。たとえば、高齢期に至っても「生産」を旨とし、そのための「対話」を怠らない者、あるいは、早々と「安定」と「共生」を選択し、そのための心身エネルギーの持続にウェイトを置く者など、さまざまな組み合わせが可能なのである。それら組み合わせの賢い選択によって、自身の生の時間を有意義かつ有

効に行使用することができ得るといえよう。

ところで、ここで、私どもは改めて気づかされるのではないか。生の時間の長期化によって「発達」概念の更改を迫られ、それぞれのステージが掛け替えない意味と価値で彩られることになっても、最初の段階、仮にそれを「未成年期」とおおまかにくるとして、そのステージに与えられる意味と価値には、さほど更改が必要ないということに……。とりわけ、「未成年期」を細分化して、その初期段階を一つの分節単位として位置づけるなら、この不変性はより鮮やかに私どもの目を射るであろう。発達観が更改され、それに伴って一生の追求目標が変化する。しかし、それにもかかわらず、乳幼児が立つべき人生の最初のステージが変わらぬ色に彩られるとき、私どもは、この時期の「発達」の不変性と普遍性を改めて確認させられ、心強い思いに捉えられるのではないだろうか。